

主 題：パウロの誇り5

聖書箇所：ローマ人への手紙 15章25-29節

今日はローマ人への手紙15章25節から見ます。パウロは父なる神に対して忠実なしもべでした。ダビデがモーセが、そして、多くの主なる神の恵みによって罪赦された勇者たちがそうであったように、主にその救いを感謝するゆえに、大きな犠牲をもって愛してくださった主の愛を覚え、その主を愛するゆえに、人々は忠実に歩み続けました。だから、信仰の勇者と呼ぶにふさわしいのでしょうか。どれだけのことを知っていたからではありません。彼らはどのように歩んだのか？まさに、その歩みをもって彼らは主を愛し主に信頼を置いていたことを明らかにしました。ローマのクリスチャンたちに記したこの手紙の目的、その理由を説明したパウロ、その説明の中にもパウロがどのような人であったのか、彼の人物像を見ることができるといことで、私たちは前回から学んでいます。

☆パウロの人物像

A. 主に忠実であった人

確かに、パウロは主に対して忠実な人でした。

1. 福音を伝える務め、開拓伝道の働きを忠実に行なった 19b-21節

福音を伝えるという主から与えられた務めに対して、特に、彼はまだ福音が伝わっていないところに出て行って福音を伝えるという、つまり、開拓伝道の働きにおいてキリストの忠実なしもべでした。キリストの福音を「くまなく伝えた」、神の導きに従って、機会あるごとに、福音を知らない人たちに福音のメッセージを語り続けていったのです。

2. 主のみこころに忠実に従い続けた 22-24節

そして、彼は主のみこころに従い続けた人でした。私たちもそのようでありたいです。私たちもそのことを主から望まれています。そして、一つ付け加えるなら、主のみこころに従って生きる人生こそが主の栄光を現わす人生であり、そのように歩む時に、私たちはこの地上にあって主から大きな祝福をいただきます。みこころに従って生きる時に、私たちはこの世のいかなるものをもっても得ることができない喜びをもって、満足をもって歩むことができるのです。そのような人生を歩むようにと神は私たちに機会をくださっています。私たちはそのことをしっかりと覚えることが必要です。

B. 愛の人であった 25-29節

もう一つ、パウロの人物像を25節から見ると、パウロは「愛の人」でした。もちろん、これまで神に対してここまで忠実であった人が愛の人でないということはありません。忠実に従うのは神を愛しているからです。ですから、間違いなく、これまでのパウロ自身の歩みを見るとき、どれ程彼が神を愛していたのかは明らかです。この25節からの箇所にもそのことが記されています。

1. エルサレム教会への愛 エルサレム訪問の理由 25-27節

1) 聖徒たちに奉仕するために 25節

25節「**ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。**」、これが私がエルサレムへ行こうとしている理由であるとパウロは言います。ここに「**奉仕するために**」ということばがありますが、これは「仕える、給仕する、世話をする」、また、「衣食住などの生活のことで奉仕する」という意味もあります。ですから、そのような必要のある人に仕える、奉仕するという、その意味のことばをパウロは使っています。なぜ、パウロがそのようにしようとしたのでしょうか？実は、パレスチナ

に飢饉があったからです。紀元46-48年頃にパレスチナに飢饉が襲いました。その様子は使徒の働き11章27-30節に記されていますが、ユダヤの歴史家であるヨセフスが記した中に出て来ます。ちょうど、今のイラクとイランの北、トルコの南東部にあたります。その地域にアディアベネという国がありました。その国の王女ヘレネ、彼女はユダヤ教に改宗します。その後、彼女の王や王国が祝されたことを目撃したヘレネはエルサレムの神殿を訪れて、神に感謝のささげものをしたいと願い出ます。そして、念願叶って、彼女がエルサレムに到着したときの様子を歴史家ヨセフスは次のように語っています。「王妃ヘレネの到着はエルサレムの人たちにとって大きな幸いであった。というのは、そのときの都は飢餓に苦しみ、多くの人々は必要なものを買う金がなくて死んでいくという状態であった。そこで、ヘレネは従者のうちのある者をアレクサンドリアに遣わして大量の穀物を買付けさせ、また、他の者をキプロスに出して干しいちじくを船積みさせた。そして、従者たちがそれらの食料をもって急いで立ち戻ると、それを困窮者に分配した。王妃ヘレネが大量の穀物をエジプトから輸入して困窮者に配った大飢饉がユダヤを見舞ったのは、ファドスとティベリオス・アレクサンドロスの時代のことである。」と。このファドスとティベリオス・アレクサンドロスはユダヤの総督であって、彼らが総督として仕えたのは紀元44年から46年、46から48年で、この辺りに飢饉がこの地域を襲ったようです。

ですから、このような歴史的事実があったのです。大変な飢饉がこの地域を見舞ったので食べ物なかったのです。多くの者が飢餓に苦しみ餓死する者たちがあったのです。それを知ったパウロは、何とかこの人たちを助けようとして行動を起こすのです。パウロはこのときだけではありません。至るところで兄弟姉妹が苦しんでいる様子を聞いたときに、ひもじくて食べ物がないという困り果てている様子を聞いたときに、彼は何とか彼らを助けようとしています。彼自身がこのように告白しています。ガラテヤ2:10「**ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところ です。**」と。このように貧しい人たちを顧みるということは大切なことであって、パウロ自身も「私もそのようにやって来た」と言っているのです。ですから、私たちが今見ているこの箇所でも、パウロはローマに行く前にエルサレムに行かなければならないと言うのです。それはギリシャの南部、また、北部からもエルサレムの人たちへの贈り物を得たからです。その贈り物をもって行きたいし、そして、私自身も何とかエルサレムの人たちのために労したいと、そのような思いをもっていたのです。人々のことが気になったのです。彼らの必要に対して目をつぶっていることができなかったのです。必要のある人たちに何とか答えようとしたのです。

ですから、パウロはこの25節で「**奉仕する**」ということばを敢えて使いました。エルサレムにいる飢餓で苦しむ兄弟たちの必要を満たすことが、クリスチャンとして為すべき当然のことであると確信していたので、「奉仕する、仕える」ということばを用いたのです。必要のある人たちに私は仕えたい、彼らの必要を何とか満たしたいというパウロ自身の思いが、この中に記されています。だから、パウロは「愛の人」だったのです。人の必要に目を閉じるような人物ではなかったのです。いろいろな教会が困窮している、様々な必要がある、皆さんもそのような呼びかけに対して、犠牲的にささげものをささげてくださった人たちです。そして、このような愛の行動はイエス・キリストを信じる一人ひとりのうちに共通して見ることのできるすばらしい特徴です。愛を語っていても愛を行動に現わさなければその信仰は本物かどうか？とみことばは私たちにチャレンジします。ヤコブもそのことを言います。2:15-17「**もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、:16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。:17 それと同じように、信仰も、もし**

行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」、ヨハネもこのように言います。Iヨハネ3：17-18「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」と。言い方を変えるなら、主によって救われた者たちは主がもっておられる愛をもって人を愛し、神を愛する者へと変わっていきます。だから、当然、私たちは必要のある人たちに何とか応えていきたいとします。それがパウロであり、それが他のクリスチャンたちであったとみことばは教えるのです。

2) その愛は次のように示された 26-27節

26節を見るとパウロは、実は、同じような愛をマケドニアとアカヤのクリスチャンたちに見ることができると言っています。彼らもパウロが持っているのと同じ愛を示したことが記されています。どのように示したのか、その例を見ましょう。

(1) 良いものを分け与える

26節に「それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醵金することにしたからです。」とあります。マケドニアは現在のギリシャの北部にあたります。そして、前回見たように、アルバニアなどの旧ユーゴスラビアの一部を含むのですが、アカヤ地方はその南、アテネやコリントが含まれます。その地域にある諸教会のクリスチャンたちがエルサレムの貧しい人たちのために「醵金した」とあります。つまり、愛というのは自分たちの良いものを分け与えるという形で明らかにされたのです。このマケドニアやアカヤのクリスチャンたちは、自分たちがいただいている良いものを人々に喜んで分け与えようとしたのです。それをもって彼らの愛が明らかになりました。パウロが

26節に記した「醵金」ということばは「ある目的のために金銭を出し合う」という意味です。このことばのギリシャ語は皆さんよくご存じでしょう。「コイノニア」というギリシャ語です。一般的にこのことばは「交わり」と理解しますが、「交わり、関与する」ということばです。名詞形として新約聖書に19回出て来ますが、その中の16回は「ともにあずかる、働きにあずかる、ともに苦しみにあずかる、福音を広めるためにともにあずかる」というように使われています。もちろん、「交わり」という意味でも使われています。また、3回はここにあるように「醵金」であったり、IIコリント9：13では「このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。」、「与える」であったり、ヘブル13：16では「善を行なうことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」、「人に分ける」と、人に対する援助、寄付という意味をもったことばとして使われています。

また、この「コイノニア」の動詞形を見ても新約聖書に8回出て来ますが、その中のローマ書12：13では「聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。」とあり、「協力し」、つまり、これは「分かち合う」という意味です。ですから、このマケドニア、アカヤのクリスチャンたちはエルサレムの困っている人たちのために、自分たちに与えられているお金をささげようとするのです。

◎どうして、困っている人たちのために、必要を抱える教会のために援助するのか？

先ほどから見ていることば「コイノニア」、交わりです。キリストの家族としてその交わりの中にいるから、私たちは兄弟姉妹だから、だれかが困ったなら助けようと彼らは生きたのです。よくご存じのようにIコリント12：13に「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたか

らです。」とあるように、イエスを信じる者、神によって救われた者はみな一つです。エペソ2：14にも「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、」とあります。「隔ての壁」とはユダヤ人と異邦人の壁です。この二つのグループの間に高くそびえていた壁をキリストは打ち砕いたのです。イエス・キリストを信じる者たちの間にはユダヤ人も異邦人もなくなったのです。みな主にあって兄弟姉妹、一つです。確かに、パウロはそのことをローマ人への手紙の中で詳しく教えています。みことばが確かに私たちに教えるのは、私たちはキリストにあって一つです。エペソ2：19でもこのように言っています。「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」と。主の家族に国籍も人種も貧富、地位などによる差別は存在しないのです。また、そのような差別があってはならないのです。みな同じ家族の一員なのです。そこには偏見なしの交わりがあるはずです。それが「コイノニア」です。良いものをもって必要を共有し合っていくのです。家族だから…。このような交わりをマケドニヤやアカヤのクリスチャンたちはしていたのです。これがクリスチャンです。これが私たちの信仰です。

(2) 喜んで犠牲を払う / 信仰の実

彼らは喜んで犠牲を払っていました。だから、マケドニヤ、アカヤの人たちも「愛の人」と言えるのです。27節に「彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、」と記されています。26節にも「マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために…」とありました。つまり、マケドニヤとアカヤのクリスチャンたちはささげものを喜んで心からささげたと記されています。でも、私たちがこのことを正しく理解するためには、マケドニヤの教会がどのような状況にあったのか、そのことを知る必要があります。

IIコリント8章を見てください。そこにパウロ自身がマケドニヤ教会について記しています。8：1-2「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思えます。:2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」、私たちが聖書からこのようにして情報を得るなら、エルサレムの教会の貧しい人たちのためにマケドニヤ教会は喜んでささげものを集めました。醵金をしました。しかし、彼ら自身は裕福ではありませんでした。パウロは「極度の貧しさ」ということばを使っています。このことばは「貧しさのドン底状態」という意味です。ウォーレン・ワーズビーという神学者は「何ももっていないだけでなく、何かを得る希望がまったくない物乞いを表わすことばだ。」と言います。ですから、ただ貧しかったというのではなく、貧しさの究極です。このような人たちがエルサレム教会が大変な苦しみにあると聞いて、彼らは喜んで何かをささげようとしたのです。躊躇しなかったし、余ったものをささげたのではないことは明らかです。彼らが何を捻出したかは分かりませんが、少なくとも、彼らがこれをささげたいとしたものは彼らの犠牲であったことは明らかです。

しかも、3節には「私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、」と書かれています。できることだけをしたのではなく、彼らはそれ以上のことをしたと言うのです。こうして、マケドニヤの諸教会がエルサレムの兄弟姉妹のためにささげたと、それだけでも私たちは驚かされるのですが、4節には「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。」とあります。つまり、このマケドニヤの人たちが望んだことは、私たちもエルサレム教会の人たちのために、彼らの助けになる働きに加わりたいということです。そして、「願ったのです。」ということばは「何かを乞う、懇願する、いってせがむ」という強い願いを表わします。聖徒たちを支える交わりの恵みに何としても加わりたいと「願った」のです。しかも、現在形なので彼らは懇願し続けたのです。何も持っていない彼らが困っている人たちのために何かさせてくださいと懇願し続けたのです。

なぜ、彼らはそこまで強く願ったのでしょうか？自分たちの貧しさを思うと「実は、私たちも貧しいので、ささげたいけれど手伝いたいけれど何も出来ません。」と言っても不思議ではなかったのです。なぜ、彼らはこのようにエルサレムの兄弟姉妹たちの必要に答えようとしたのでしょうか？その答えが実は、今読んでいるⅡコリント8章に記されているのです。見てください。1節「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた...」、その次に「神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。」とあります。

「神の恵み」だと言うのです。実は、今日、私たちが見ているローマ15章には28節に「それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実...」と書かれています。「実」ということばを聞いた時に皆さん思い出しませんか？イエスは「:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と言われました（ヨハネ15：4－5）。パウロは彼らのささげ物を「実」と呼んだのです。Ⅱコリント8章では「神の恵み」のことを話すのです。明らかに、このマケドニア教会のクリスチャンたちの愛とは、彼らが生まれながらに持っていたものではなくて、彼らが救いをいただいたことによって神からいただいた愛です。しかもそれだけでなく、彼らが神とともに歩んだゆえに、神は彼らのうちに約束通りに実を实らせたのです。その実は「愛」です。彼らが生まれながらに非常に優しい人たちだったとか思いやり深い人々だったということではないのです。救われたことによって、主とともに忠実に歩み続けることによって、彼らの生き方が変わったのです。必要のある人たちに対してその必要に答えて行こうとなったのです。

もう一度、Ⅱコリント8章を見てください。ここに記されているマケドニアの諸教会のクリスチャンたちが非常に霊的な人たちであったと記している四つの箇所が出て来ます。これはまさに成長したクリスチャンの特徴です。

もう一度、Ⅱコリント8章を見てください。ここに記されているマケドニアの諸教会のクリスチャンたちが非常に霊的な人たちであったと記している四つの箇所が出て来ます。これはまさに成長したクリスチャンの特徴です。

◎成長している人の特徴 Ⅱコリント8：2－5

(a) 状況に左右されない喜びがある 2節

2節「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」、つまり、彼らは状況に左右されない喜びをもって

いたのです。このマケドニアのクリスチャンたちは、自分の思い通りに物事が進む進まないに関係なく喜びを持っていたのです。なぜなら、この喜びは「神の喜び」だったからです。喜べる時に喜び、そうでない時には喜ばないというのではこの世の中の喜びと変わりません。しかし、みことばが言うように、イエス・キリストによって救われたあなたには神の喜びが与えられたのです。その喜びというのは状況に関係しないのです。神が喜びをくださるから、神とともに歩んで行くなれば、その喜びが私たちのうちから無くならないのです。非常にシンプルです。だから、いつも喜びがあるかどうかということでは

(b) 主の前に正しいこと、主のみこころに適うことを自発的に行なっている 3－5節

3－5節「私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、:4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。:5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」、先ほどから見ているよう

に、
彼らは貧しさのどん底にいたにもかかわらず、喜んで聖徒たちのためにささげようとしたのです。ですから、恐らく、彼らから集まったものは高価なものではなかったでしょう。でも、人々は高価なものをいただいたからといって必ずしも喜ぶとは限りません。イエスがお喜びになるのは、有り余る中から大金をささげた者ではなく、2レプタ硬貨をささげた一人のやもめです。彼女はすべてをささげたから主はそれを大いに喜ばれたのです。問題は「心」です。私たちはどのような心をもって神を見、どのような心をもって生きているかです。マケドニヤの人たちは喜んでささげたのです。IIコリント9：7には「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」とあります。神はマケドニヤのクリスチャンたちをどれ程喜んでおられたことでしょうか？彼らは「できません、無理です。」ではなく「何かをささげましょう」と言って喜んでささげたのです。神はそのような人を喜ばれる、そういう人を神は愛してくださるのです。その人たちの特別な祝福です。

(c) 自分の必要よりも人の必要を優先している 4節

4節に「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。」と、彼らはここまで懇願し続けたのです。なぜ、彼らはそれ程までにするのでしょうか？その様子を第三者的に見るなら、だれかはこのように言うかもしれません。「必要を求めるのはあなたたちではありませんか？もしかすると、エルサレムのクリスチャンの方があなたたちよりも豊かかもしれない。」と。でも、このマケドニヤの人々はそんなことを考えていないのです。彼らはささげようとしたのです。皆さん、是非考えてください。彼らはなぜ、そのような行動に出ることができたのでしょうか？答えはみことばに見ることができます。IIコリント9：8「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」、つまり、何もなくてもささげようとしている人たちは、神に対する信頼をもっているのです。「私の必要は必ず神が満たしてくださる」という信頼です。ピリピ4：19でも約束されています。「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。」、イエスは山上の説教の

中で何と言われましたか？「空の鳥を見なさい。花を見なさい、だれが養っているのです？」と。このマケドニヤの人たちは自分たちは何も持っていないけれども、その中でも彼らはささげられる物をささげたいと言ったのです。自分たちの生活のことなど心配していないのです。それは神が満たしてくださることを信じているからです。

(d) 他の信仰者に祝福をもたらした 9：12

9：12「なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。」、つまり、「この奉仕のわざ」とはマケドニヤ教会のクリスチャンたちがささげ物をしたということです。そのことによって聖徒たち、つまり、エルサレムのクリスチャンたちの必要を満たしただけでなく、彼ら自身が神への感謝をあふれさせると言うのです。なぜ、パウロがこんなことを言ったか？マケドニヤ教会は殆どが異邦人です。異邦人たちが無い中から喜んで犠牲的にささげた時に、そのささげ物を受け取ったユダヤ人たちが、主がこんなにすばらしい働きを異邦人のうちに為して私たちは一つにされたと、その恵みを神の前に感謝するということです。つまり、霊的に成長している人たちは、そのような祝福を人々にもたらすのです。当然です。その人たちの生き方が神のみこころに従って生きているからです。その人たちが神とともに歩んでいるからです。そ

の人たちとともにいることによって祝福を受けるからです。パウロがなぜローマのクリスチャンたちと出会うことを望んだのか？もうすでに私たちが見て来たように、それは彼らが霊的に大人だったからです。そのような人たちとともにいたい、ともにいることによって励ましを得るからと言うのです。

この「奉仕のわざ」について、もう一箇所見てください。マケドニアのクリスチャンたちは確実に成長していました。その秘訣がこのように記されています。Ⅱコリント 8：5 **「そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」**。信仰者の皆さん、あなたが成長していくために必要なことは「あなた自身を捨てること」です。あなたの思い、考え、

夢などを捨てて、主のみこころを求めてそれに従って行くことです。「神さま、今日、私の為すことのすべて、考えることのすべてがどうぞみこころであるように。あなたのみこころに適ったものであるように。」と。彼らはそのような歩みをしていたから、彼らの信仰は成長し、先ほど見たように、状況に左右されない喜びを持っていたし、そのような中であっても神のみこころに従い続けて行こうという思いを持ち続けて、そのように歩み続けていたし、そして、彼らはいつも自分のことよりも人のことを考えてそのために何ができるかを考えて生きていたのです。そのような彼らであったゆえに人々にすばらしい祝福をもたらしたというのです。

信仰者の皆さんに覚えていただきたいのは、このような歩みをあなたも為すことができるということです。そのような信仰者としてあなたは歩んで行くことができると言うのです。そのカギはすべてみことばの中に書かれています。みこころに逆らうことはすべてあなたの自我です。だから、「自分の十字架を負ってわたしについて来なさい。」とイエスは言われたのです。それが私たちの問題であることをご存じだからです。私たちは神の助けをいただきながら、主に喜んでいただく者として日々を生きて行くことです。そうすることによって私たちは変えられるし、私たちは主によって用いられて行くのです。

彼らは喜びにあふれていました。それは彼らの心が感謝にあふれていたからです。主イエス・キリストの惜しまない犠牲を知った時に、彼らはその愛を実践する者になったのです。どうぞ、思い出してください。主イエス・キリストがどれほど大きな犠牲をあなたのために払ってくださったのか。血を流して「あなたのために」と言って身代わりとなっていたいのちを捨ててくださった主を覚えることです。Ⅰヨハネ 3：16に「**キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。**」と書かれています。まさに、そのような愛の人であり、そのような愛を実践していたパウロ、そして、このマケドニアのクリスチャンたちです。

もう一度、ローマ書に戻ってください。15：27に「**彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。**」とあります。義務のことを話します。というのは、我々異邦人はユダヤ人から霊的祝福をいただいたのだから、感謝を現わすことが必要だとパウロは言います。確かに、この救いに関してはユダヤ人の働きに負うことが多いです。使徒たちはユダヤ人たちでした。福音は最初ユダヤ人たちに語られました。そして、彼らの働きによって我々異邦人に届いたのです。ですから、そのユダヤ人たちに必要が生じた時には、我々は彼らのことを助ける、それは神の家族に属する者として相応しいことだと言うのです。このイスラエルの人々のために私たちが今覚えなければいけないことは、イスラエルのために祈り続けていくことです。神は特別な計画をイスラエルのため

に持っておられます。確かに、神に選ばれた人々です。私たちは彼らが守られて神が彼らを祝してくださるように祈り続けていくことが必要です。

彼らは良いものを喜んで分け与えました。彼らは喜んで犠牲を払いました。そして、もう一つ、

(3) 主のために生きる : すべてのことを行なう、主を崇める 27節

彼らは主のために生きていました。すべてのことを主のために行なっています。27節の後半に「物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。」とあります。ここにある「奉仕」ということばは25節に出て来た「奉仕」とは違うことばです。実は、この27節で使われている「奉仕」は「仕える」という意味があるのですが、もう一つ「礼拝」という意味も持っています。新約聖書の中に3回しか出て来ないことばです。ヘブル人への手紙10章11節では「また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。」「礼拝の務めをなし、」とあります。使徒の働き13:2では「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。」「主を礼拝し、」とあります。そして、このローマ15:27、ここでは「奉仕」と訳されていますが同じことばです。つまり、パウロが言っていることは、あなたたちがこのエルサレムの兄弟姉妹たちの物質的な必要を満たすということは、実は、神に対する礼拝に値することだ、そのようにこの兄弟姉妹たちに為す行為、それは主に対して為される行為だということです。

今は余り時間がありませんが、マタイの福音書25章で、イエスが実はそのことを語っておられます。35-36節『あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、:36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』と。

なぜ、このようなことをしたのか？なぜ、このような人々を神は祝されたか？それは、彼らの信仰がそのような行ないをもって証されたからです。このことはいずれ私たちは見たいと思いますが...

こうしてこのマケドニア、アカヤのクリスチャンたちは喜んで主に仕え続けました。主を愛する者として彼らは仕え続けました。彼らは神を愛する者でした。それは彼ら自身のその歩みを見る時に、彼らは喜んで良いものをささげ、犠牲的にささげ、そして、彼らは主のために行なっていたのです。

2. ローマ教会への愛 28-29節

エルサレム教会への愛だけでなく、28-29節にはパウロ自身のローマ教会への愛が記されています。パウロは、エルサレム教会に対する奉仕をしてから、今度はローマに立ち寄って、そして、スペインへ送り出されるという彼の計画を再びここで話しています。「:28 それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニヤに行くことにします。:29 あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています。」。このローマ訪問を、そし

て、ローマ教会によってイスパニヤへと派遣されることをパウロはここで証しています。29節に「あなたがたのところへ」と、つまり、ローマ教会を訪問するときには「キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています。」と言っています。パウロが教会を訪問したかった理由は実はここに 있습니다。あふれるばかりの祝福をとに分かち合うためだと言います。彼はローマ書1:12で「というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」と言っています。ですから、パウロはただ何となく出かけて行って何となくその人たちに会って...ではなかったの

です。パウロが願っていたことは、ローマ教会を訪問して、あなたたちも神からすばらしい祝福をいただいている、私もいただいている、そのすばらしい祝福を分かち合うことによって互いの信仰の成長に役立てたいということでした。

パウロの関心は私たちが信仰において益々成長することです。そのことを願っています。私たちが集まったときに私たちはどんな話をしているのでしょうか？パウロは「私がどんな働きをして来たのか、私の自慢話をしますから聞いてください」ではなかったのです。自慢話をするような集まりにパウロは関心をもっていません。もちろん、私たちもそうです。なぜなら、私たちが集まるときのその場は自慢話をするためであってはならないのです。その場は私たちの自慢である主の自慢をするために集まるのです。「私たちの自慢は、私たちの誇りは主です。この主がどんなにすばらしいことを私のためにしてくださったのか」です。私が主のために何をしているのかなどはどうでもいいことです。主が私に何をしてくださっているのか、そのことを私たちが語り合うときに私たちの心は喜びにあふれて行きます。

パウロの関心はそこだったのです。神が何をしてくださったのか、証とはそうでしょう。証とは、私たちが何をしたかではなく、神が私に何をしてくださっているのかです。神が私をどのように変えてくださっているかです。私たちが神のみわざをともに覚えるときに、私たちはみなその偉大な神を誉め称えるのです。パウロの願いはそこでした。1テサロニケ5：11に「**ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。**」とあります。パウロは言います。「クリスチャンが集まるなら信仰を励まし合って行きなさい。それぞれの信仰が成長するように。なぜなら、イエス・キリストにお会いする日が近いから。キリストのさばきの座に立つ日が近い。だから、しっかりと今日という与えられたこの日をそれに備えて行こう。しっかりと主を見上げて、感謝をもって、この方を称えながら歩んで行こう。」と。そのような集まりが私たちの群れの中に起こるならば、そういう集まりに集う人たちの信仰は成長します。どんな雑談をしてもどんな世的な話しをしても、そこには祝福も無いし、そこには成長も見られません。私たちが注目しなければいけないことは、私たちの神がどんなに偉大であり、どんなに偉大なことをしてくださったのかということです。そのときにこの偉大な神によって私たちは変えられて行くのです。そうしてパウロは生きました。そうしてマケドニヤやアカヤの教会の人たちは生きたのです。だから、パウロはこのローマのクリスチャンたちに会いたかったのです。

「主にあって成長しているあなたたちに早く会いたい。そして、いっしょに私たちのすばらしい神の証をしたい。そして、いっしょに成長しよう！」と。

そのような願いがあなたの願いであることを願います。「主よ、どうぞ私をもっと成長させてください。あなたに喜ばれる者にしてください。あなたに従順に従うだけでなく、あなたを愛し隣人を愛する者として成長させてください。」と、そうして彼らは生きたのです。その信仰にしっかりと倣いたいものです。

《考えましょう》

1. 兄弟姉妹が愛し合うことはどうして大切なのでしょうか？
2. 兄弟姉妹への愛を実践するために必要なものは何ですか？
3. 「人に傷つけられたり、人に対して怒りを覚えた」とき、どのように対応することが愛の実践だと思いますか？あなたの考えをあげてください。
4. どうして人を祝福することや、その人の信仰の成長のために励むことが愛の実践なのでしょう？